

## 第97回 記者懇談会実施概要

- 1 日 時 2014年6月4日(水) 15:00~17:00  
2 場 所 関西大学千里山キャンパス 100周年記念会館 第2会議室  
3 内 容

(1) 研究発表・質疑応答(15:00~16:00)

・内田 慶市 外国語学部教授

発表テーマ「文化交渉学と言語接触研究—周縁からのアプローチ」

・山口 智実 システム理工学部教授

発表テーマ「固定砥粒研磨技術の確立を目指して」

(2) 学内状況説明・情報交換(16:00~17:00)

- ① 平成25年度就職・キャリア支援状況について 資料1
- ② 第34回「地方の時代」映像祭2014  
コンクール参加作品の募集および映像祭フォーラムの開催について 資料2
- ③ 第11回三大学連携事業について 資料3
- ④ 第3回安全フェスティバルの開催について 資料4
- ⑤ 年史編纂室特別展「世界を魅せたトップスケーター 高橋大輔選手  
織田信成選手 町田樹選手 栄光の軌跡」開催について 資料5
- ⑥ 専用宅配ロッカー「楽天BOX」の試験運用開始について 資料6
- ⑦ 関大生の活躍について 資料7
- ⑧ 第37回総合関関戦の開催について 資料8

4 大学側出席者

楠見晴重学長、黒田勇副学長、西村枝美学長補佐、  
内田慶市外国語学部教授、山口智実システム理工学部教授、  
宇恵勝也キャリアセンター所長、原徹キャリアセンター事務局次長、  
乾友篤キャリアセンター事務グループ長、藤本清高総合企画室長、  
中川雄弘広報課長、宮武明生学長課長 他

5 参考資料

- (1) 関西大学通信 第432号、第433号  
(2) 関西大学ニューズレター「Reed」No.37  
(3) 第43回生涯学習吹田市民大学 関西大学講座 チラシ  
(4) 関西大学教育・学習活動研究プロジェクトユニット 国際シンポジウムチラシ  
(5) 行事予定表(6月~7月)

以 上

【次回(第98回)記者懇談会開催予定】

日 時: 2014年7月16日(水) 15:00~17:00  
場 所: 千里山キャンパス 100周年記念会館 第2会議室

## 文化交渉学と言語接触研究—周縁からのアプローチ

外国語学部・東アジア文化研究科担当教授 内田慶市

### [概要]

私たちの東アジア文化研究科は平成 19 年度に GCOE プログラムとして採択された「東アジア文化交渉学教育研究拠点」の大きな成果を基礎として 2011 年度に開設されたものである。この「文化交渉学」とは、国家や民族という分析単位を超えて、東アジアという一定のまとまりを持つ文化複合体を想定し、その内部での文化生成、伝播、接触、変容に注目しつつ、トータルな文化交渉のあり方を複眼的で総合的な見地から解明しようとする新しい学問研究であり、その中心的な方法論として「周縁からのアプローチ」を唱っている。ここでは従来の人文学の学問分野ごとの研究枠組みの越境と民族や地域という研究枠組みの越境という 2 つの越境が求められ、拠って立つ方法論の一つとしては「周縁からのアプローチ」が挙げられる。

筆者の元々の専門は中国語学（近代漢語研究）であるが、そうした個別的语言学研究からこの 20 数年は特に近代における東西における言語文化接触を主な研究テーマとして、特に西洋人の中国語研究や宣教師を主な担い手とした 16 世紀以降の「西学東漸」と言語文化接触に関わる研究を行ってきた。今回はこうした研究内容とその可能性等について述べることにする。

### [プロフィール]

1951 年福井県生まれ。1978 年大阪市立大学大学院文学研究科博士課程満期退学。現在、関西大学外国語学部・関西大学東アジア文化研究科担当教授。博士（文学）、博士（文化交渉学）。

主要な著書に『近代における東西言語文化接触の研究』（関西大学出版部、2001）、『遐邇貫珍の研究』（沈国威氏らとの共編、関西大学出版部、2004）、『19 世紀中国語の諸相—周縁資料（欧米・日本・琉球・朝鮮）からのアプローチ』（沈国威氏との共編、雄松堂出版、2007）、『言語接触とピジン』（沈国威氏との共編、白帝社、2009）、『文化交渉学と言語接触—中国言語学における周縁からのアプローチ』（関西大学出版部、2010）、『漢訳イソップ集』（ユニウス、2014）などがある。

東アジア文化交渉学会副会長、世界漢語教育史研究学会副会長、中国近世語学会理事、日本中国語検定協会常務理事、元吹田市教育委員会委員長。

## 固定砥粒研磨技術の確立を目指して

関西大学教授 山口智実

### 【概要】

一般に工作物表面の平滑加工の最終仕上げには、遊離砥粒方式であるポリシングが主として用いられているが、スラリー廃棄等の環境面、および平坦性・平滑性・無擾乱性両立の困難さによる精度保証面において課題を抱えている。特に、ガラスやシリコンなど硬脆材料表面の超平滑加工では、メカノケミカル (MC) 反応を有する MC 砥粒を用いたポリシングが行われるが、このポリシングでは、超平滑化は可能であるものの、上述した問題に加えて加工能率が非常に低いといった問題がある。

その解決策として、固定砥粒方式による研磨加工が期待されており、その加工の一つとして超仕上が考えられる。超仕上は、今からおよそ 80 年前、転がり軸受軌道面の最終仕上げ加工として米国で開発され、一般にブロック状砥石による定圧低速作業面連続加工であり、加工変質層が薄く、短時間での鏡面仕上が可能、といった特徴を有する。

我々は、(株)ミズホと共同で、硬質砥粒砥石並みの結合力をもつ MC 砥粒砥石、および MC 砥粒に CBN 等の硬質の超微細砥粒を複合した複合砥粒砥石 (MC 複合砥粒砥石) を開発し、光学ガラス (BK7)、単結晶シリコン、そして単結晶サファイアの平滑化加工に対して、それぞれ  $\text{CeO}_2$  砥石、 $\text{BaSO}_4$  (硫酸バリウム) 砥石、そして SD (ダイヤモンド) / $\text{SiO}_2$  砥石と各種 MC 砥粒を用いた単実／複合砥粒砥石による超仕上を適用してきた。現時点で、各々の加工に対して未だ最適超仕上条件を確認するには至っていないものの、どの材料に対しても従来のポリシングの前工程となるラッピングと同等の仕上げ面粗さが得られている。しかも、仕上げ時間が、BK7 ガラスでおよそ 30 秒、単結晶シリコンでおよそ 3 分、超高硬度のサファイアでさえ 15 分程度と非常に短時間で達成している。

このように、超仕上による研磨は、仕上げ面粗さで評価すれば、仕上げポリシングには未だ及ばないものの、従来のラッピングと同等の性能を有していると言える。また、その加工能率で比較すれば、超仕上の方が優れているのは明らかであり、今後、この分野でのさらなる発展が期待できる。

### 【プロフィール】

1960 年大阪市生まれ。関西大学システム理工学部機械工学科教授。1984 年東京大学工学部精密機械工学科卒業、1989 年東京大学大学院工学系研究科精密機械工学専攻博士課程修了、工学博士。(財) 京都高度技術研究所を経て、1994 年関西大学工学部機械工学科専任講師に着任。1999 年 Stanford University 客員研究員 (1 年間)。2007 年から現職。専門はナノ・マイクロ加工、生産機械システム。1997 年第 18 次工作機械技術振興賞論文賞受賞。日本機械学会、精密工学会、砥粒加工学会、日本ロボット学会に所属。